



TITLE:

京大広報 No. 530

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 530. 京大広報 1998, 530: 596-605

ISSUE DATE:

1998-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196584>

RIGHT:



京大広報

No. 530

1998. 12

目次

大学の動き

- 長尾総長の中華人民共和国訪問597
- 平成11年度大学入学者選抜
- 大学入試センター試験の実施597
- 京都大学自衛消防団が京都市自衛消防隊
- 訓練大会に左京区代表として出場597
- 厚生補導(SPS)担当教官研究会の開催598

部局の動き

- 大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
- 創設記念式典・祝賀会599
- 再生医科学研究所「再生医工学に関する
- 国際シンポジウム」の開催599
- 公開シンポジウム「現代青年と『癒し』」の開催 ...600

日誌600

栄誉

- 家森幸男大学院人間・環境学研究科教授が
- 紫綬褒章を受章601
- 医学教育等関係業務功労者の表彰601

訃報602

紹介

大学院工学研究科機械工学系 3 専攻602

洛書

地震予知研究40年 田中寅夫604

話題

クラブ紹介 相撲部605

お知らせ

「白馬山の家」の冬季開設605



本部構内初の地上 8 階建の工学部物理工学系校舎
-- 関連記事本文602ページ --

大学の動き

長尾総長の中華人民共和国訪問

長尾 真総長は、10月27日から31日までの間、中華人民共和国の上海へ出張した。

この間に復旦大学で開催された「第4回東アジア研究型大学協会年次総会」(Association of East Asian Research Universities)に出席するとともに、上海交通大学謝 繩武校長、復旦大学方 林虎副校長等と懇談する機会を得た。

AEARUは、日本、大韓民国、中華人民共和国、台湾の16大学をメンバーに、1996年に設立された協会で(本学は1997年に加入)現在、研究者及び学生を対象に、担当校を定めワークショップやサマーキャンプ等の事業を行っている。ちなみに、本学は本年11月24・25日に情報学研究科の池田克夫研究科長を中心に Web Technology Workshop を開催した。

平成11年度大学入学者選抜大学入試センター試験の実施

平成11年度大学入学者選抜大学入試センター試験は、平成11年1月16日(土)及び17日(日)の両日に実施される。

このため、本学では1月14日(木)の授業が休止される。

試験の概要は、次のとおりである。

1. 期日及び試験教科

1月16日(土)

外国語、地理歴史、数学①、数学②

1月17日(日)

国語、理科①、理科②、公民

2. 試験場及び受験者数

農学部試験場(北部構内)、法学部・経済学部・工学部試験場(本部構内)、総合人間学部試験場(総合人間学部構内)、医学部試験場(南部構内)、薬学部試験場(南部構内)及び関西文理学院試験場

合計 7,696人

京都大学自衛消防団が京都市自衛消防隊訓練大会に左京区代表として出場

自衛消防団は、火災その他変災に備えるため、京都大学防火規程に基づき、京都大学(医学部附属病院地区を除く吉田キャンパスを所掌)、医学部附属病院及び宇治地区等に設置されている。

京都大学自衛消防団では、あらゆる非常事態に際し、適切かつ能率的に活動し得るよう訓練を重ねている。また、本年7月から女性消防団員3名が初めて加入した。

去る10月29日(木)に京都市消防学校で開催された第21回京都市自衛消防隊訓練大会において、京都大学自衛消防団は、訓練種目「消防ポンプ車操法訓練」に左京区代表として出場し、日ごろの訓練成果を披露した。

なお、本大会は、消防技術の向上のため毎年開催

されているもので、この日は各行政区から選抜された37事業所の自衛消防隊が参加した。



訓練大会に参加した京都大学自衛消防団員

京都大学自衛消防団員として、総長から委嘱されている職員は、次の方々である。

| 所 属 | 氏 名 | 備 考 | 所 属 | 氏 名 | 備 考 |
|-----|-------|-------|-----|--------|-----|
| 総務部 | 坂本 安行 | 団 長 | 総務部 | 小林 正信 | 団 員 |
| 工学部 | 湯浅 純 | 副 団 長 | " | 小谷 嘉奈 | " |
| 総務部 | 尾上 雅男 | " | 経理部 | 堂本 泰樹 | " |
| 経理部 | 井山 有 | " | " | 坂本 雄美 | " |
| 工学部 | 仲田 三勝 | 団 員 | " | 青山 茂男 | " |
| " | 竹中 寛 | " | " | 橋本 義雄 | " |
| " | 太田 倫弘 | " | " | 傍島 孝 | " |
| " | 武岡 良子 | " | " | 辻本 和夫 | " |
| 農学部 | 向江 勝一 | " | " | 増良 光 | " |
| " | 黒坂 良 | " | 施設部 | 池正 和 | " |
| 総務部 | 岡島 徹 | " | " | 吉川 正 | " |
| " | 池田 達志 | " | 企画室 | 池本 まゆみ | " |

(備考欄の 印が大会参加者)

厚生補導(SPS)担当教官研究会の開催

学生部では、毎年学生の厚生補導(Student Personnel Service)に関する諸問題を討議・研究するため厚生補導担当教官研究会を開催している。今年度も11月7日(土)～8日(日)に琵琶湖畔のホテルレークビワで、長尾 真総長、三好郁朗副学長、学生部委員、学生部職員等48名の参加を得、「厚生補導からみた学生への支援で、これから何が求められているのか、何ができるのか」を主たるテーマに標記の研究会を開催した。

高等教育教授システム開発センターの大山泰宏助手による「SPSと大学の理念」と題する講演があり、これからの学生支援について、正課教育との連携、新入生対象のガイダンス、外国との比較等多くの視点から活発な討議が行われた。また課外活動施設の石山艇庫とボート部合宿所を見学し、本年度の全日本大学選手権の舵手付きペアで優勝した部員等の指導により試漕体験も行われた。



部局の動き

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科創設記念式典・祝賀会

本年4月に大学院アジア・アフリカ地域研究研究科が設置されたことを記念して、10月16日(金)に京大会館において創設記念式典と祝賀会が挙行された。出席者は、文部省高等教育局大学課中島節夫課長補佐をはじめ、長尾 真総長など、学内外から100名近くに及んだ。本研究科は、博士課程5年一貫制教育を採用し、アジア・アフリカの諸地域におけるフィールドワークを教育・研究の基礎とするきわめてユニークな独立研究科である。

式典ではまず、坪内良博研究科長が新研究科の理念と抱負について述べた後、長尾総長から、京都大学が長年にわたって培ってきたフィールドワークと「臨床知」の方法論を教育の場に活かすことへの期待を込めた挨拶があった。つづいて佐々木正峰文部省高等教育局長の祝辞(代読 中島課長補佐)、本研究科の設立を推進された井村裕夫前総長から祝辞があった。最後に、佐藤禎一文部事務次官等からの

祝電が披露された。

式後に開かれた祝賀会では、坪内研究科長の挨拶につづき、本研究科の母胎となった豊島喜則大学院人間・環境学研究科長並びに研究科設立にご尽力いただいた元総長特別補佐の佐藤幸治法学研究科教授から祝辞が寄せられた。中川博次名誉教授の発声で乾杯した後、盛会のうちに閉会した。



(大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

再生医科学研究所「再生医工学に関する国際シンポジウム」の開催

再生医科学研究所は本年4月に設置されたが、これを記念した標記シンポジウムが10月20日(火)・21日(水)の両日にわたり京都市国際交流会館において開催された。

今回のシンポジウムは、再生医工学分野の最先端の研究を行っている海外の研究者9名と国内の研究者7名を講演者として招へいし、約150名の参加者を得て活発な意見交換が行われた。

1日目は井村裕夫前総長の開会の辞、山岡義生再生医科学研究所長の挨拶で始まり、再生医工学にとって重要な基礎医学・生物学の領域である細胞の発生や分化に関する最新の研究成果について、米国ユタ大学 G.S. スパングルード教授が「リンパ球前駆体の移植」、大阪府立母子保健総合医療センター研究所 長沢丘司博士が「発達におけるケモカイン SDF-1/PBSF の基本機能」、再生医科学研究所 開 祐司教授が「軟骨細胞の分化制御因子と血管化阻害因子」、米国オレゴン大学 J.ウェストン教授が

「神経幹細胞の多分化能、移動、アポトーシス」、東京都臨床医学総合研究所瀬原淳子博士が「筋芽細胞の分化と筋発生」と題する講演を行うとともにフロアとの活発な討議が行われた。最後に「京都における生体組織工学」と題して再生医科学研究所 筏 義人教授より京都大学で行われている再生医工学の実際の応用例について特別講演が行われた。

また、同日午後6時より、同会館において再生医科学研究所設置記念祝賀会を兼ねて国際シンポジウムのレセプションが開催され、山岡再生医科学研究所長の挨拶に続き、長尾 真総長、岩崎豊久文部省学術国際局研究機関課国際プロジェクト官から祝辞が述べられた後、山室隆夫名誉教授の発声で乾杯、シンポジウム参加者及び学内外関係者等約80名がなごやかに歓談し午後8時盛会のうちに終了した。

2日目は再生医工学に必要な基礎理工学技術ならびにその臨床医学への応用に関する最新の研究成果について、講演と討議が行われた。講演者と講演題

目は次のとおりである。

スウェーデン国カロリンスカ研究所

L. ハーマストロム教授「歯根膜とエムドゲンの再生」

スイス国チューリッヒ大学

J. A. ハベル教授「創傷治療における操作と蛋白接着の活性相互作用」

九州大学医学部

松田武久教授「循環器の生体組織工学」

米国インディアナ大学

D. B. バー教授「骨再生における力学刺激」

名古屋大学大学院工学研究科

生田幸士教授「医療におけるマイクロマシンとロボット工学」

京都大学大学院医学研究科

松末吉隆講師「骨頭欠陥における部分的形成術」

英国ロンドン医科大学

D. リー教授「関節軟骨細胞に対する力学荷重の影響」

スイス国ベルン大学

EB. フンツィケル教授「関節軟骨の部分的欠陥の修復」

米国ノースカロライナ大学

L. M. リード教授「生体人工肝臓の成功を支配する要素」

ドイツ国ギーセン大学

M. D. ブレンデル教授「ギーセン大学移植センターにおける臨床的膵臓移植と世界的に見た現在の業績並びに将来の展望」

最後に再生医科学研究所池内 健教授より閉会の辞が述べられ、2日間にわたるシンポジウムは参加者に研究への多くの刺激を与え、滞りなく終了した。
(再生医科学研究所)

公開シンポジウム「現代青年と『癒し』」の開催

学生懇話室と保健管理センターの共催により、「心」の問題を取り上げる公開シンポジウム「現代青年と『癒し』」が、11月9日(月)の午後2時から4時30分まで、医学部基礎第一講堂において開催され、学生、大学院生及び一般市民等約150名の参加者があった。

シンポジウムは三好郁朗副学長ならびに齋藤久美子学生懇話室長の挨拶により開幕し、森岡正博大阪

府立大学総合科学部教授が「いま必要なのは癒しではなく、自己との戦いなのではないか」、上田紀行東京工業大学大学院社会理工学研究科助教授が「自己の欲望を再創造せよ！それが癒しだ」の演題によりそれぞれ現代社会における癒しの性質やその危険性についての話題提供があり、その後、白熱した議論を展開した。フロアの参加者からも活発な質問があいつぐ充実したシンポジウムとなった。

(学生懇話室・保健管理センター)

日誌

(1998年10月1日～10月31日)

10月6日 評議会

7日 中華人民共和国 陳 文博教育部部長助理他8名来学、総長及び関係教官と懇談

12日 フランス共和国 Maurice RENAUD グルノーブル地方・大学ネットワーク会長来学、総長及び関係教官と懇談

" 京都大学春秋講義 月曜講義(以降の日程は、19日、26日、11月2日、9日)

13日 発明審議委員会

14日 環境保全委員会

" 京都大学春秋講義 水曜講義(以降の日程は、21日、28日、11月4日、11日)

20日 評議会

21日 国際交流委員会

" 国際交流会館委員会

30日 インドネシア共和国 スラバヤ教育大学

Toho Cholic MUTOHIR 学長他 1 名来学，
鈴木健二郎国際交流委員会委員長及び関
係教官と懇談

31日 京都大学市民講座（以降の日程は，
11月14日）

栄誉

家森幸男大学院人間・環境学研究科教授が紫綬褒章を受章

我が国学術の向上発展のため顕著な功績を挙げたことにより，家森幸男大学院人間・環境学研究科教授が，平成10年11月3日に，紫綬褒章を受章された。

以下に同氏の略歴，業績等を紹介する。



家森幸男教授は，昭和37年
京都大学医学部医学科を卒業，
同42年同大学大学院医学研究
科博士課程を修了，同年京都
大学医学部助手となり，助教
授を経て，同52年島根医科大
学教授に就任した。平成4年

本学大学院人間・環境学研究科教授（環境保全発展
論講座担任）に就任し，今日に至っている。

同教授は，モデル動物を用いた循環器疾患の発症
機序の研究によって業績をあげ，ヒト脳卒中のモデル
動物として今日広く使用されている脳卒中易発症
ラットの開発に成功し，これを用いて，脳卒中の予
防法についての基礎的研究を行った。その後，この
成果をヒトの疾患予防に応用すべく昭和60年 WHO

の協力を得て，循環器疾患と栄養に関する国際共同
研究を開始し，その先頭に立って，世界各地の様々
な食生活をおくる集団を調査した。さらに，高血圧
原因遺伝子を検索して，その発症をあらかじめ予
知・予防するための研究にも尽力している。

この間，国際 SHR 学会会長，日本高血圧学会会
長を務め，昭和58年より「循環器疾患の一次予防に
関する WHO 国際共同研究センター」センター長と
して管理運営と発展に貢献している。これらの一連
の業績に対し，科学技術庁長官賞研究功績者表彰，
日本心臓財団草野賞，米国心臓学会高血圧賞，日本
心臓財団佐藤賞，美原賞，上原賞，アカデミア賞，
岡本国際賞，ベルツ賞など数々の賞が授与された。

この輝かしい業績を考えると，このたびの受章
は誠に喜ばしい。

（大学院人間・環境学研究科）

医学教育等関係業務功労者の表彰

稲垣美智子技官（医学部附属病院准看護婦）は，
医学に関する患者診療等に係る補助的業務に関し，
また，宮部末子技官（医学部附属病院主任臨床検査
技師）は，医学に関する教育研究に係る補助的業務
に関し顕著な功労があったことにより，11月24日，
文部大臣より平成10年度医学教育等関係業務功労者
の表彰を受けた。



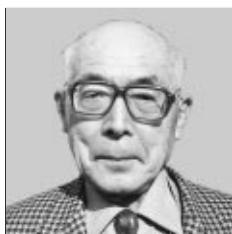
稲垣美智子氏



宮部末子氏

訃報

太田 証次郎 名誉教授



本学名誉教授太田証次郎先生は、10月18日逝去された。享年90。

先生は、昭和8年京都帝国大学理学部を卒業、同学部副手嘱託、助手の後、兵庫県立神戸高等商業学校教授、同23年本学理学部講師、助教授を経て、同33年京都大学教授（吉田分校）に就任、同38年教養部に配置換えとなり、地学を担当され同46年停年により退官された。昭和49年京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、昭和46年4月から岐阜歯科大学（同60年4月、朝日大学に名称変更）教授となり、客員教授を経て、同63年朝日大学名誉教授となられた。

先生のご専門は地球電磁気学で、この分野における幅広い研究において優れた研究業績を残され、また教養部における地学、特に地学実験において、内容の改革と充実を計られるなど、地学教育の体系作りに多くの功績を残された。

また、昭和33年本学に創設された地磁気世界資料センター（現大学院理学研究科附属地磁気世界資料解析センター）の責任者としての重責を果たされ、学会においては、日本地球電磁気学会の幹事及び評議員等の要職を歴任され、学術の進展に大いに貢献し、その功勞により、昭和45年11月日本地球電磁気学会から表彰され、長谷川記念杯を受けている。

これらの一連の教育研究活動、学会活動により昭和54年4月勲三等瑞宝章を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（総合人間学部）

大橋 保夫 名誉教授



本学名誉教授大橋保夫先生は、10月23日逝去された。享年69。

先生は、昭和28年京都大学文学部文学科を卒業後、本学文学部助手、教養部講師、助教授を経て、同48年教授に就任し、平成4年10月総合人間学部に配置換えとなり、同5年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、名古屋外国語大学教授を務められた。

先生は、極めて幅の広い学問分野に関心を示され、その研究領域は、一般言語学、フランス語学（文法

基礎理論等）、フランス語教育法、フランス文学、フランス現代思想さらにはマルコ・ポーロ研究など多岐にわたっている。その業績として、『仏和大辞典』（伊吹武彦他と共編）の編纂のほか多数の論文・翻訳を發表された。とりわけ文化人類学者レヴィ＝ストロース著『野生の思考』の翻訳（みすず書房刊）は名訳の誉れが高い。

先生は、日本とフランスの文化交流にも永年にわたり尽力された。その貢献と実績に対し、昭和50年フランス政府からパルム・アカデミック勲章シュヴァリエ級を授与された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（総合人間学部）

紹介

大学院工学研究科機械工学系 3 専攻

機械工学系教室は平成9年に創設100周年を迎えた。明治30年本学の創立と同時に3講座から出発し

た機械工学科は産業の発展にともない講座を増設、昭和30年代に精密工学科、機械工学第二学科（その

後物理工学科と改称)が作られた。平成6年度の改組により、機械系3学科は金属系2学科、原子核工学科及び航空工学科とともに物理工学科(入学定員235名)という大学科になった。大学院は機械工学専攻、精密工学専攻及び機械物理工学専攻に改組され、その構成は大学院専任3講座に加え、7大講座(18研究分野)から成っている。大学院修士課程の定員は3専攻で73名、博士後期課程の定員は26名である。

老朽化し、狭隘化した工学部の教育研究施設の改築に当たっては、平成6年3月の京都市美観風致審議会では本部構内の高さ制限が20メートルから31メートルに緩和されたことに伴い、高層化が可能となり、平成8年3月、本部構内初の地上8階地下1階の研究棟(第1期工事)が完成し、今後、工学部の改築予定建物は、順次高層化される予定である。平成9年3月には第2期工事、同8月には第3期工事が完了し、これに伴い、機械系3専攻の大半がここに移転した。

最近の機械工学の発展に歩調を合わせて、機械系としては珍しい収束イオンビーム装置などをそなえたクリーンルームや、いくつかの電子顕微鏡、共通の実験室も設置された。講義室には空調も完備し、最新のAV機器も設置されて、それを用いたパソコン授業も行われ、また、設計製図は従来のドラフターに代えて、全面的にCAD演習が開始されるなど、教育環境も一段と整備された。

研究面では、従来の伝統的な機械工学の分野である機械のメカニズム、材料、熱、流体、自動制御、生産技術などの研究分野に、マイクロマシン、知能機械、生体のメカニズム、量子物性学などの分野が

加わり、21世紀の工学の柱のひとつとしての総合科学を目指した機械工学を構築しようとしている。本稿ではそのなかから2例を紹介する。

振動制御工学研究室は、構造物の振動や騒音を抑えたり、逆にこれを利用する研究をしている。スキー場や観光地などにあるロープウェイは風が吹くと揺れ、乗り心地や安全に支障をきたして運休を余儀なくされることもある。それを避けるために揺れを軽減することが望まれていた。本研究室では揺れを抑える方向におもりが動く「動吸振器」についての新しい理論を導き、それにもとづいて、円弧形の軌道をおもりが自ら走る、という簡単な機構の制振装置が開発された。その装置はLibra(天秤座)と名付けられ、1995年に北海道のリフトに世界ではじめて取り付けられた。図1は1996年に作られた榛名山ロープウェイであり、ゴンドラの屋根の上にLibraが2本ずつ取り付けられている。

マイクロマシン工学研究室では、マイクロマシンの技術を用いてミクロなツールを作成し、生体高分子や細胞などを取り扱う(manipulate)手法を研究している。遺伝情報の担い手であるDNAは、塩基対3000個あたり1マイクロメートル(1mmの千分の1)の長さを持つ細いひも状の高分子である。本研究室は、この分子を特定の位置で切断する技術を開発した。図2はその顕微鏡写真である。ひとつのDNA分子が電界を用いてまっすぐに引き伸ばされ、基板に固定されている。DNA切断酵素を固定した微粒子が接触した瞬間にそれが切断されている。このような分子加工技術は、従来は試験管の中で分子の集団に対して行っていた化学反応を、特定分子の特定位置に対して行うことを可能にするものである。



図1. 制振装置 Libra のついた榛名山ロープウェイ

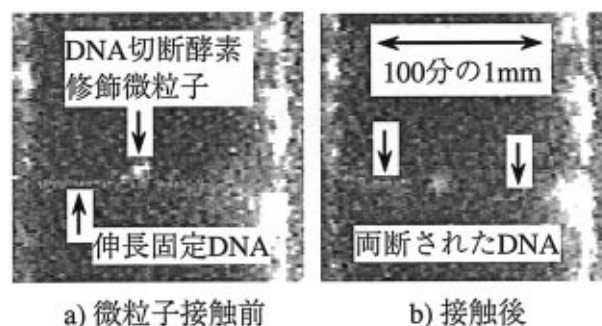


図2. 酵素固定化微粒子によるDNAの切断

(大学院工学研究科)

洛書

地震予知研究40年

田中 寅夫

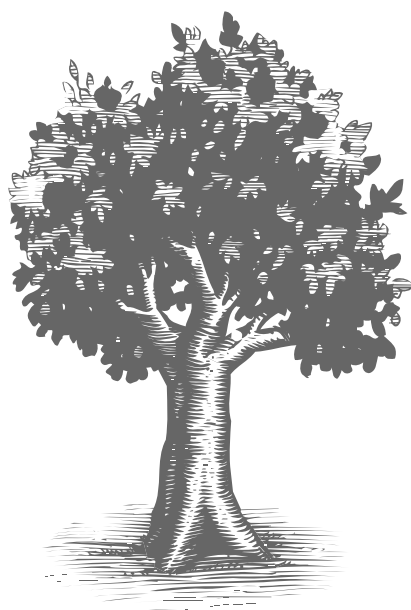
測地学審議会から、さる8月「地震予知のための新たな観測研究計画の推進について」という題目で建議が出された。今日の第7次まで34年間にわたって地震予知計画が続けられてきたが、現段階では「警報がだせる地震予知」実現の見通しは立てられないけれども、今や関連する研究で得られてきている多くの知見を総合して地殻活動の推移を理解するためのモデルを構築し、これを順次改良して地震発生の予測の確度を高めていく研究を推進する必要がある、と提案されている。

「地震予知」という言葉からは一般に直前予知「すなわちX日後に大地震が起こる」といった「予言」を頭に浮かべられるのが普通である。現在の科学ではもちろん、上のようなモデルによる予測が可能になってもこのような「地震予知」はとてもできないであろう。わが国の陸地に起こる地震の場合は1000年といった長い期間にわたってゆっくりエネルギーを蓄えてきて、それが満タンになって一挙に地震として開放されるのであるから、仮にいつ起こってもおかしくないという状態になっても10年以上も準備完了のままといった状況が続く場合も考えられ、これが地震となるのはちょっとした引き金によることも十分ありうる。

これまでは、どちらかというところ、何か有効な前兆現象を発見すればこれによって一挙に直前の地震予知ができるという考え方が優勢であった。筆者も専門の地殻変動研究の立場から、前兆的な地殻変動を検出して「地震予知」に役立てようと研究を進めてきた。これまでの研究から、予知に役立つような異常な地殻変動は震源によほど近づかないと観測できないだろうと考えられているが、大地震は滅多に起こらないから、観測データの収集はなかなか進まない。ところで、建設省国土地理院が最近展開しているGPS（世界測位システム）は日本列島の時々刻々の地殻変動を捉えており、どの地域がどれだけ歪んでいるかリアルタイムで分かるため、大地震が起こりそうなところを見つけるのに役立つと期待されている。それぞれの地域における地震の起こり方の特徴などの理解も深くなってきた。地震予知は、簡単な地域からはじめはぼんやりと、そしてだんだん予測の精度が上がっていくという進み方でゆっくりと実現できていくであろうと筆者は考えている。関係者には地震予知を目指して着実に努力を重ねていくことが強く望まれる。

（たなか とらお 防災研究所附属

地震予知研究センター教授）



話題

クラブ紹介 相撲部

川端近衛を少し東に入ると、四本柱に屋根のついた土俵が見えてくる。ここが、京都大学相撲部の「道場」である。裸にまわし、ちょんまげ姿、過度の序列社会、年寄株制度等、何かとその「前近代性」が指摘されている大相撲の世界。その善し悪しは別にして、「近代的」に、あくまでスポーツとして相撲をとらえている若人がここに集っている。

我が部は、昭和22年（1947）に創部されて以来、その滑稽さ故に、「見るスポーツであって、やるスポーツではない」と言われる相撲を取り続けてきた。多くの部員が在籍した時もあれば部員不足で休部に追い込まれた時もあり、強い時もあれば弱い時もあったが、昨年、50周年を迎えることができた。

現在、部員は6名、マネージャーが4名という状況であるが、「強き者よし、弱き者さらによし」という我が部のモットーに共感した社会人や他大学の学生も我が部の稽古に参加している。日頃の稽古は、和気藹藹としたところもあるが、各自が目標を持ち、



一度土俵に上がると双葉山に変身（心）する。

今年度は全国国公立大学対抗相撲大会で優勝し、西日本学生相撲個人体重別選手権大会（75kg未満級）でも準優勝した。体重別大会の軽量級では入賞の常連校でもある。たまには強豪同志社大学や近畿大学の選手から白星を挙げることもあり、明るい中にも一生懸命な京都大学相撲部は、学生相撲界の花形になりつつある。

お知らせ

「白馬山の家」の冬季開設

本学の学生及び教職員の厚生施設である「白馬山の家」を、今冬については下記のとおり開設しますので、ご利用ください。

この「山の家」は、中部山岳国立公園白馬山麓^{つがいけ}の杓池^{あずみ}高原^{おたり}にあり、雄大な北アルプスの峰々に囲まれ、積雪量も多く、雪質の良さとともにスキーには絶好の条件を備えており、初心者向きから上級者向きまで各種のゲレンデがあります。

なお、建物は山小屋風の木造地上2階、地下1階建てで、間取りは1階が食堂兼談話室、2階が寝室、地階が浴室、乾燥室等からなっています。

記

1. 名 称 京都大学^{はくば}白馬山の家（電話 0261・83・2405）
2. 所 在 地 長野県北安曇郡^{あずみ}小谷村^{おたり}大字千国字^{ちくに}柳久保乙869の2
（交通機関）JR 大糸線「白馬大池駅」下車、松本電鉄バス「親の原^{おや はら}」下車、徒歩約20分
3. 開設期間 12月20日（日）～ 1月10日（日）並びに 2月20日（土）～ 4月10日（土）
4. 収容人員 26名
5. 所要経費 1人1泊 使用料120円、ほかに食費、暖房費等実費
6. 申し込み及び利用に関する詳細は、体育会事務室（総合体育館内、電話学内2574）に照会してください。
7. そ の 他 当施設には、駐車場がないため、自動車での来場はご遠慮ください。

【参 考】（昨年）開設期間 12月20日（土）～ 1月10日（土） 2月20日（金）～ 4月10日（金）

延利用者数 331名（内訳12月42名、1月0名、2月26名、3月263名、4月0名）